

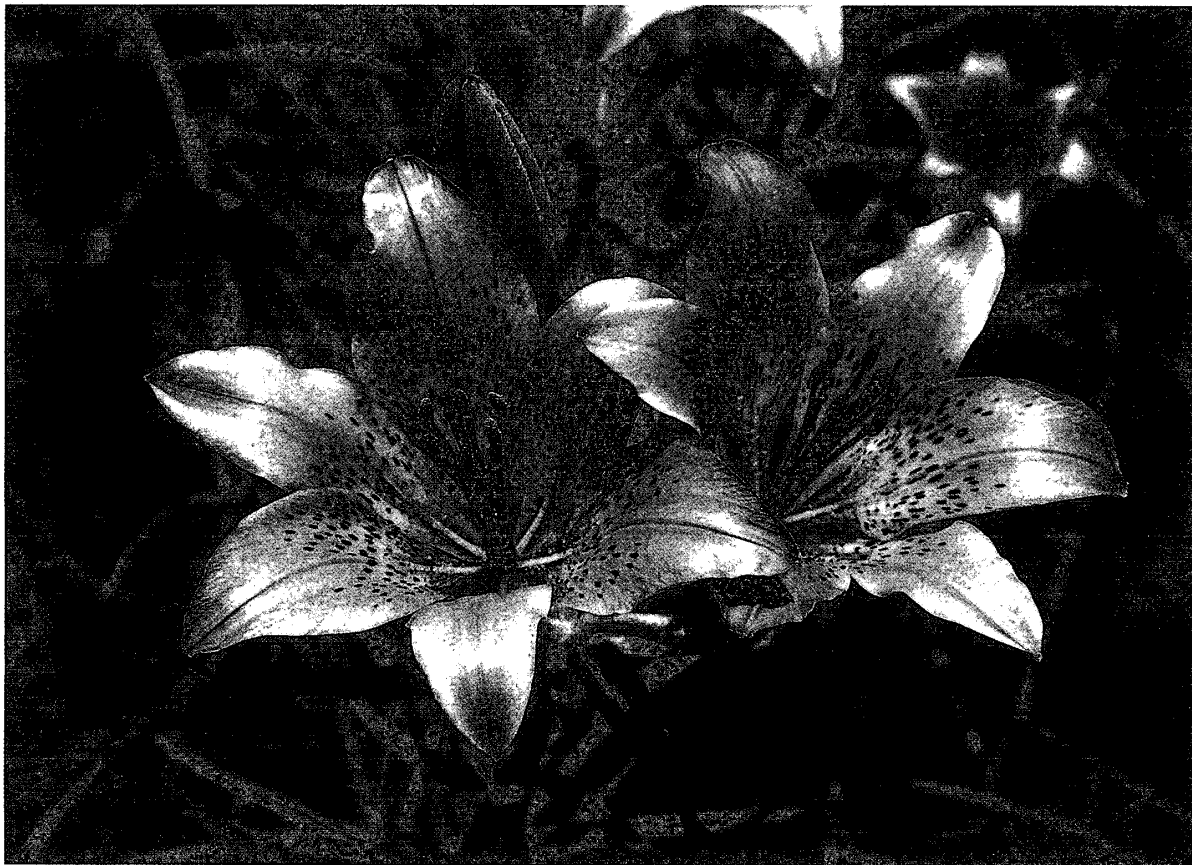
そして、夏が来た

And, Summer is Come (PHOTOGRAPH)

藤 原 等

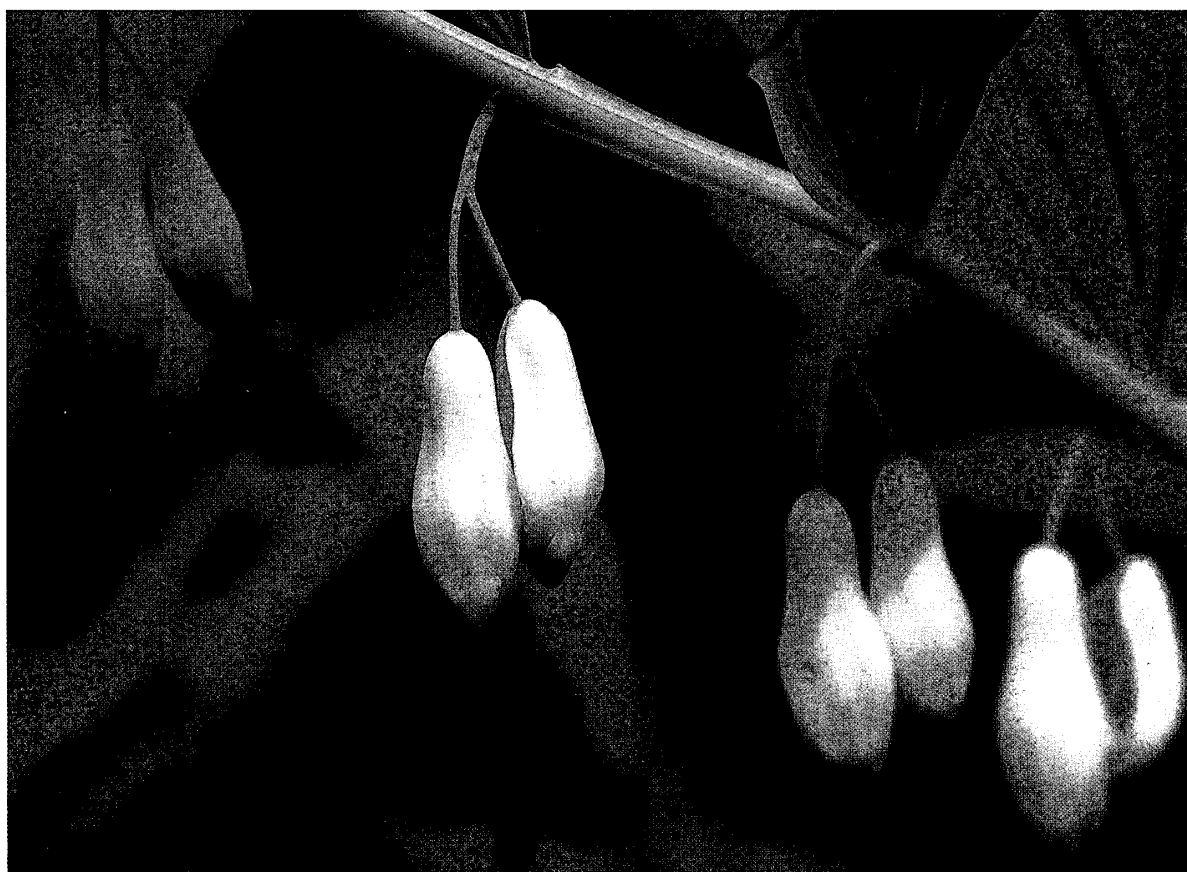
FUJIWARA, Hitoshi













ボクの中学生時代は、白黒のモノクローム写真全盛期であったから、当然のことながら1枚の写真画面の中の白の部分と黒の部分の分量の比率を凝ってみたりしていた。厳密に言えば白と黒のハーフトーンの占める比率がものを言うわけであるが、陽と陰をある意味で追いかけていた。絶対非演出の瞬間をキャッチするという土門拳的な発想にはなかなか出来なかった。スナップ写真はライカ型のカメラが普及することで次第にその位置を確立してきたわけだが、ボクの2眼レフではそうはいかなかったのである。それでも、当時一世風靡の木村の写真や土門の写真の中にも白黒のモノクローム写真の美を見つけようと考えていた。

今年、夏から秋に移るころ因藤壽（いんどう・ひさし）先生におあいした。日本を代表する黒を中心にすえたモノクローム絵画（油彩）の第一人者である。ボクの中学校時代の美術の先生なのである。小川原脩記念美術館（倶知町）の小川原脩さんは先日他界されたが、ボクの中学校時代には麓彩会といって羊蹄山、ニセコ連峰の山麓に居住し制作活動を展開していた作家たちの集まりによって組織されていた集団があった。小川原脩さん、因藤壽さん、酒井嘉也さん、野本惇さんなど今考えると、どうして、後志地方の片田舎倶知町の周囲にこのような作家が居住されていたのか不思議に思える。倶知町公民館で開催された麓彩会展において、ボクは因藤壽先生のモノクローム絵画と馬場怜先生の墨象作品に決定的に影響を受けたのである。写真における白と黒の世界の追究に、鼻たれ小僧のボクが運命的な影響を受けたのである。そのことを、あれから、随分と時間が経過しているが、北海道立旭川美術館・北海道新聞社共催の

因藤壽回顧展の会場展示作品の前で因藤壽先生に初めてお話することができたのである。嬉しい時間でありました。因藤壽先生の黒を中心にすえたモノクローム絵画は、実はその前の時代の作品群においてすばらしく豊かな色彩、光に満ち満ちた色彩の世界を展開されており、一転、黒中心のモノクローム絵画に展開していくという、この道筋が何であったのか、あらためて解説してみなければならぬと考えさせられた。

因藤壽先生は、「私のモノクローム作品の中に光に満ちた色彩の世界が存在することを藤原さんは見抜くことができますか」とおっしゃられたように思い、ボクは、「このようにカラフルな原爆（広島）をテーマにした作品を見たことがない」という、おおよそ質問の主旨とは違う答をして、歩行が困難になられた先生の姿に羊蹄山を見た。この頃、ボクの身体は重大な危機の中にあったのだが……。

「そして、夏が来た」の作品群は、最近のボクの夏のイメージで、あまり太陽がキラキラ輝くような夏の写真が撮れなくなったなんて、ふと、思ったりもするが、中村善策さん（小樽美術館でお会いできる）ばりの作品にしようなどと少しだけ気張って見たわけである。近ごろ、ボクの作品はカラー写真が中心になってしまった。あらためて因藤先生のモノクローム作品に圧倒された夏の終わりだった。時は流れるが、今が旬であると考えことにしたい。仕事は降る星のごとくたくさん存在しているから挑戦してみたい。

使用機材

1. キヤノンEOS3. キヤノンEF 17mm-35mmL ズーム.
2. キヤノンEOS7. キヤノンEF 24mm-85mm ズーム.
3. キヤノンEOS7. キヤノンEF 70mm-200mmL ズーム.
4. キヤノンEOS7. タムロンSP 24mm-135mm ズーム.
5. フジGA645W Professional. フジノン 45mm F4.
6. ペンタックス645N. SMCペンタックスFA645ズーム 45mm-85mm F4.5, SMCペンタックスFA645ズーム 33mm-55mmAL.

撮影地（作品順ではない）

1. 小樽海岸
2. 石狩川河口
3. 道民の森（神居尻地区、牧場南地区）
4. 恵庭溪谷
5. 門別海岸
6. 石狩川砂丘（はまなすの丘公園）